

# 徳島城下町の構造と変遷 — 城下絵図の GIS 分析 — GIS Analysis on the Structure and Changes of the Tokushima Castle Town

平井 松午<sup>1</sup>・塚本 章宏<sup>1</sup>・田中 耕市<sup>2</sup>・根津 寿夫<sup>3</sup>

Shogo Hirai<sup>1</sup>, Akihiro Tsukamoto<sup>1</sup>, Koichi Tanaka<sup>2</sup> and Hisao Nezu<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 徳島大学 総合科学部、徳島市常三島町

<sup>1</sup> Tokushima University, Minamijosanjima-cho, Tokushima City, Tokushima

<sup>2</sup> 茨城大学 人文学部、水戸市文京町

<sup>2</sup> Ibaraki University, Bunkyo-cho, Mito City, Ibaraki

<sup>3</sup> 徳島城博物館、徳島市徳島町城内

<sup>3</sup> Tokushima University, Tokushimacho-jonai, Tokushima City, Tokushima

**あらまし**：阿波国徳島城下町は、天正13年（1585）に建設が開始された。初期には、城下町の範囲は防衛的機能を有する新町川や助任川に挟まれた徳島・寺島地区を中心としたが、その後、新町川南岸に寺町・新町地区が形成された。このような「内町・外町」型を呈する徳島城下町の都市プランは、寛永16年（1639）以降の城下町再編により大きく変容した。すなわち、寺町・新町に接して、伊予・讃岐街道および土佐街道沿いの佐古・富田地区に、長方形街区からなる足軽組屋敷や町屋が新たに整備された。これは、徳島城下町が徳川期の都市プランをもつ城下町に変化したことを意味する。

本報告では、明治3年（1870）頃に作成された「阿州御城下絵図」（徳島県立博物館蔵）をGIS分析に用い、スプライン変換した画像データを、GIS上で寛永18年（1641）の新城下地区「屋敷割之図」や文化6年（1809）の「実測分間絵図」と比較することで、徳島城下町の拡大過程の把握を試みた。

**Summary** : Construction of the Tokushima castle town in Awa province began in 1585. The area of the early castle town comprised the Tokushima and Terashima districts between the Shinmachi River and Suketo River. Its primary purpose was that of defense. The districts of Teramachi and Shinmachi were built on the south shore of the Shinmachi River. The initial urban planning of the castle town of Tokushima followed the "Inner Town / Outer Town" model. However, the original plan was largely transformed when the district was reorganized after 1639. Specifically, rectangular blocks were developed on the Iyo/Sanuki and Tosa Highways located in the Sako and Tomita districts, respectively. The residences of Ashigaru (lowest samurai) and Machiya (town houses of merchants and artisans) were also newly constructed in the blocks. This indicates that the design of the castle town changed from the defensive urban plan in the Toyotomi period to a plan focused on the highway in the Tokugawa Shogunate period.

In this study, image data of the "Ashu-Gojoka ezu (map of Tokushima castle town)," which was made in about 1870 (Tokushima Prefectural Museum Collection), using spline conversion, was prepared as a base map for GIS analysis. We tried to grasp the enlargement process of the Tokushima castle town area by comparing this basemap with the "Yashiki-wari-zu (map of relocation residences of samurai)" made in 1641 and the "Jissoku-bungen-ezu (surveyed map)" made in 1809.

**キーワード**：城下町、城下絵図、GIS分析、徳島

**Keywords** : castle town, historical maps of castle, GIS analysis, Tokushima

## 1 はじめに

城下絵図の中でも、近世中期以降に作成されてくる城下屋敷割絵図や町絵図は情報量が多く、古地図のGIS分析に比較的適している(平井 2014a)。そうした城下屋敷割絵図や町絵図をベースに作成したGIS城下町図と、城下居住者(侍・町人)に関する歴史情報データベースとを組み合わせ、城下町の町割や土地利用の変化、侍の居住地移動や居住者異動などを明らかにすることで、幕藩社会の都市構造分析に直結する城下町研究・城下絵図研究の深化が期待される(平井 2012・2014b)。さらには、同一地域においてスケールや表現内容の異なる複数の古地図情報(例えば市中絵図と建物差図など)を同じGIS上で展開することで、さらなる地域の実像解明や景観復原が可能になる(平井 2014c)。

本報告は、豊臣期の天正13年(1585)に城下町が建設着手された徳島城下町を事例に、近世城下絵図を用いて城下町構造のGIS分析を試みるものである。

## 2 徳島城下町の概要

天正13年の四国平定後に入封した蜂須賀家政は湊山(現在の城山、標高61.7m)に平山城を築き、翌14年には布令によって積極的に町人の移住を奨励し、

以後、城下町建設が進む。豊臣政権のもとに成立した徳島城下町は、全国的にみても早期に成立した城下町の一つである。

徳島城下町プランの特徴は、吉野川の分流である新町川・寺島川・助任川・福島川などの網状河川を利用した「島普請」にある(服部 1966)。建設当初の徳島城下町については不明な点も多いが、基本的には豊臣期の都市プランを反映したと考えられる。すなわち、城郭が位置する徳島地区ならびに大手筋(通町)にあたる内町・寺島地区を中心に、出来島・福島・常三島・住吉島の6島と寺町・新町地区が徐々に整備された(図1)。

徳島藩では城番家老による分権的支配体制から藩主直置体制へ移行する中で、寛永15年(1638)までに阿波九城(支城)の破却が進み、寛永末～正保期の1640年代には川口番所や境目(国境)番所、阿波五街道が整備された。また、阿波九城を警護していた家臣団が徳島城下に集住したことから、在郷の佐古村や(東・西)富田浦の一部が新たに城下に組み入れられた。この新城下地区には徳川期の都市プランが採用され、伊予・讃岐街道および土佐街道を軸に足軽組屋敷や町屋からなる長方形型の街区が整備された。これにより、「御山下」と称する徳島城下町の縄張りがほぼ

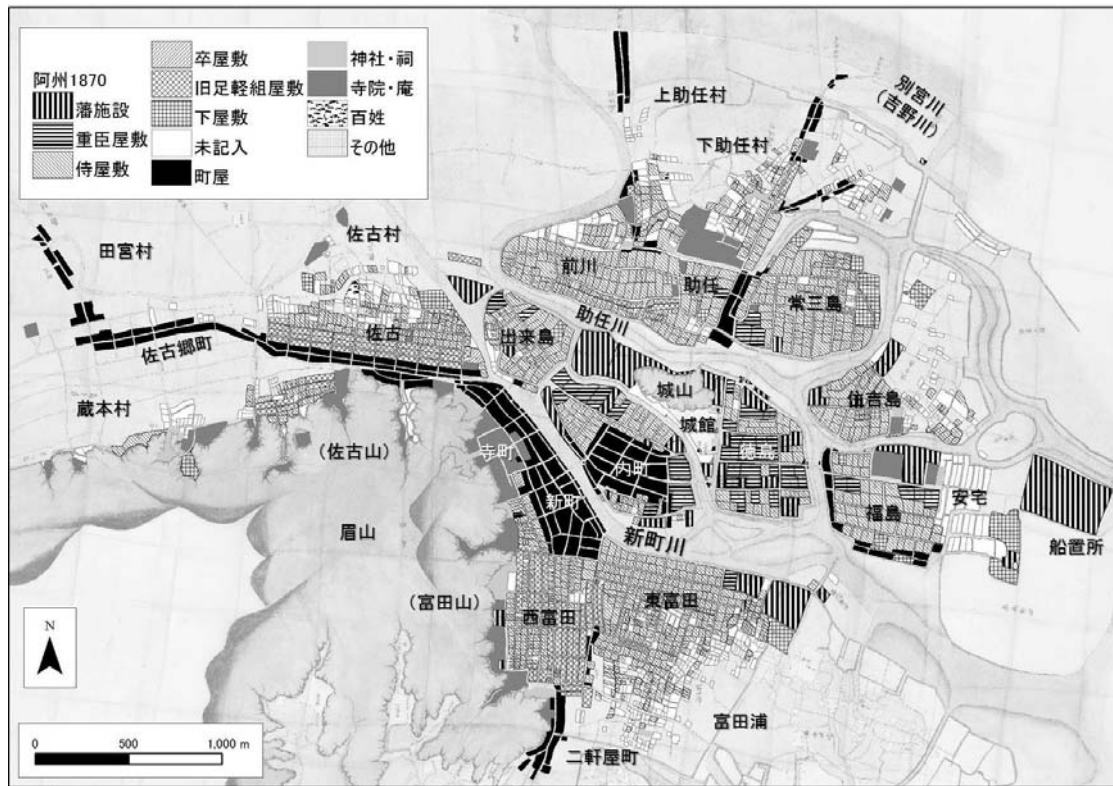


図1 明治初期の徳島城下町

下図は「阿州御城下絵図」(徳島県立博物館蔵)。

確立された。

徳島城下町全体をカバーする城下屋敷割絵図は、元禄4年(1691)以降、明治初期までに16点を数えるが、城下南辺の土佐口に位置する二軒屋地区を除いて町絵図は確認されていない。城下屋敷割絵図の多くは見取図であるが、18世紀末以降には実測図系の絵図も作成されている。今回は、このうち明治2～4年(1869～71)年頃作成と推定される実測図系の「阿州御城下絵図」(徳島県立博物館蔵)をベースマップとして、徳島城下町のGIS分析を試みることにしたい。

### 3 対象資料「阿州御城下絵図」

今回対象とした「阿州御城下絵図」は、「明治五年壬申 阿州御城下絵図入袋 五月吉日 矢部禎吉」と表書きのある袋に収納されている。御城内西ノ丸に置かれた長久館(明治2～4年)や版籍奉還後に設置された租税方、裁判所、藍方、産物方、牧民所、司船方などの記載があることから、明治4(1871)年7月の廃藩置県以前の徳島城下における屋敷割を示すものと推察される。

明治初期の徳島城下絵図を用いた理由は、GISを用いて城下町の変遷史的 analysis を行う際には、できるだけ幕末期の城下絵図を基図として用い、基図から作成したGIS町割・屋敷割データを、作成時期の古い城下絵図より得られる地理情報に適宜置き換えることで、遡及的かつ変遷史的 analysis が可能となるからである(平井2012)。

版籍奉還後の明治初期に作成されたとみられる城下絵図は、他にも4点確認できる。徳島県立博物館所蔵の「徳島藩御城下絵図」「徳島城下絵図」、徳島県立図書館所蔵の「徳島御山下絵図」「徳島舊士族禄高付図」である。このうち、後三者については町割・屋敷割の区画のみが記載されていて侍氏名・町名などの文字情報を欠くか、利用制限のため対象から外した。「徳島藩御城下絵図」は「阿州御城下絵図」とほぼ同じ仕立て・内容の絵図であるが、「徳島藩御城下絵図」の方位が文字(東西南北)で表記されているのに対し、「阿州御城下絵図」には文化・文政期(1804～1830年)に活躍した測量家・岡崎三蔵らが用いた花形方位盤記号が用いられていて一定の精度を有していると考えられることから(平井2014d)、本分析に際しては「阿州御城下絵図」を採用した<sup>2)</sup>。「阿州御城下絵図」の図幅は縦133×横191cmで、縮尺は図の中央部で1/2,560～1/2,775の値を示す。

ただし、「徳島藩御城下絵図」「阿州御城下絵図」とともに侍(旧家臣)屋敷区画は記載されているものの、侍氏名は姓のみしか記載されておらず、侍名が記載さ

れていない屋敷地も多いことから<sup>2)</sup>、徳島藩(蜂須賀家)家臣の家譜を編集した『徳島藩士譜』(宮本編1972・73)から得られる侍(藩士)家系の情報とリンクを張るには時間を要することになる。そこで本報告では、明治2(1869)～4年頃の「阿州御城下絵図」から作成したGIS城下町図をもとに、他の城下絵図の地理情報を踏まえて、徳島城下町における町割の変遷を中心に考察していくことにしたい。

### 4 「阿州御城下絵図」のGIS分析

古地図・絵図を用いるGIS分析については、一般的には次のような手続きで行われる。

- 1) GISソフト上で、古地図・絵図の高精細画像データと重ね合わせるベースマップ(数値地図・オルソ空中写真など)を展開する。
- 2) 古地図・絵図とベースマップの同一地点にコントロールポイント(CP)を設定し、古地図・絵図の高精細画像データをジオリファレンス(幾何補正)する。これにより、古地図・絵図の画像データに位置情報を付与することが可能となる。この段階でCPの誤差値を用いて、古地図・絵図の精度や歪みも計測できる(田中・平井2006、塚本・磯田2007、塚本2012・2014、渡辺・小野寺2014、出田・南出2014、渡辺・野積・平井2014ほか)。
- 3) ジオリファレンスした古地図・絵図の地図情報を、点的・線的・面的データごとにトレースしてそれぞれレイヤを作成する。
- 4) GISソフトのシンボル機能や解析機能などを用い、作成したGISデータをもとに土地利用や侍居住地などの多様なデジタルマップを表示・分析する。

「阿州御城下絵図」についても同様な手続きで分析を行った。その際にベースマップとして用いたのは、昭和21年(1946)10月撮影の米軍撮影空中写真(USA-R515・517・519)である。ただし、この米軍撮影の空中写真についても、数値地図化した平成9年(1997)作成の1/2500徳島市全図をベースに位置補正(幾何補正)を行った。これにより、数値化した昭和21年米軍撮影の空中写真画像は、国土地理院の基盤地図情報(GISデータ)とほぼ重なる。

そうした前手続きののち、「阿州御城下絵図」については確認できた全ての同一地点561カ所にCPを設定した。これをアフィン(一次多項式)変換すると、最小誤差1.21m、最大誤差257.72m、平均誤差値RMS54.64mという結果が得られた<sup>3)</sup>。同様の手法で位置補正した曲尺1分2間(約1/1,200～1,260)の「洲本御山下画図」(徳島大学附属図書館蔵)や「鳥取城下絵図」(鳥取県立博物館蔵)の場合にはRMS

がそれぞれ 2.67m、7.95m という結果が得られていて (平井 2012・2014b)、これらの城下絵図と較べると「阿州御城下絵図」の精度はかなり劣る。

「阿州御城下絵図」は、おそらくは 1 分 4 間 (1/2,400~1/2,600) 程度<sup>4)</sup>の分間 (縮尺) で作成されたとみられる。奥書や凡例を欠くものの、絵図仕立てからみてその原図は、徳島藩の測量家であった岡崎三蔵が文化 8 年 (1811) に完成したとする「徳島御山下分間絵図」の可能性がある。ただし、岡崎三蔵らの測量法を記した『図解 南阿量地法国図付録』(徳島県立図書館呉郷文庫)によれば、実測分間絵図は村図の分間を 2 寸 1 町 (約 1/1800) とするのに対し、城下町図は 1 寸 1 町 (約 1/3600) としている。つまり、『図解 南阿量地法国図付録』に従えば、「阿州御城下絵図」は「徳島御山下分間絵図」よりも大縮尺で作成されたことになる。ちなみに、徳島県立図書館所蔵の「徳島御山下絵図」は呉服尺 1 寸 1 町の分間で作成され、花形方位盤記号を有する実測図とみられることから、本図がこの「徳島御山下分間絵図」(もしくはその写図)に該当する可能性が高く、徳島県立博物館所蔵の「徳島藩御城下絵図」「阿州御城下絵図」は「徳島御山下絵図」をベースに版籍奉還後に作成されたと考えられる。その際、新設された役所名や藩庁に徴用された士族名(姓)を書き入れる調整(複製)段階で、絵図の分間を拡大変更した際に地図に歪みを生じた可能性がある。

ただし、本報告は絵図の精度や歪みの測定を目的としているわけではないことから、GIS 徳島城下町図の作成にあたっては、いったんアフィン変換して幾何補正した絵図画像データを、さらにスプライン変換して誤差値をなくし、「阿州御城下絵図」の画像データを昭和 21 年撮影の米軍空中写真とできるだけ重ね合わせるようにした。スプライン変換はサーフェス全体の曲率を最小限に抑える数学関数を用いた内挿法で、これによりアフィン変換で生じる誤差値 RMS の大半が 0m か 0m の近似値を示すことになるが、幾何補正した絵図画像データの一部に歪みを伴うことになる。

しかしながら、多くの個所では城下絵図と数値基盤情報(道路縁)はほぼ重なり合い、その後に道幅が拡張された状況も把握できることから、城下町の町割や侍屋敷地の分析に大きな支障はないと判断した。

## 5 「阿州御城下絵図」にみる土地利用

図 1 は、幾何補正(位置補正)した「阿州御城下絵図」をトレースし、用途別に区分した土地利用図である。「徳島御山下絵図」と同じく、「阿州御城下絵図」には御山下地区だけでなく、在方の下八万村、南浜浦、

北浜浦、南齊田浦、山城屋浜、新浜浦、田宮村、矢三村のほか、侍屋敷や在郷町を一部包摂する富田浦、佐古村、蔵本村など、比較的広範囲が描かれ、これらの村浦にも無記名の屋敷地が記入されている。

寛政 8 年 (1797) の年紀が記されているものの、記載の侍氏名から安政期 (1854-60) の状況を示す「御山下絵図」(個人蔵)には、富田浦の潮除堤内や住吉島、下助任村、上助任村、佐古村、蔵本村の地内に「御年貢地建家」の付箋が多数貼られていて、これらの大半は「屋敷拝領不仕諸士」の屋敷地とみられる。その多くは、拝領地不足のために城下(山下)内に屋敷地が下賜されず、年貢地である郡代支配地に居住している中〜下級家臣と推定される。徳島県立博物館所蔵の「徳島藩御城下絵図」では、南浜浦や北浜浦にもそうした侍(士族)屋敷地を確認できるが、他の無記名の屋敷地については侍屋敷なのか百姓屋なのか判断がつかない。

また、実測分間図系以外の城下屋敷割絵図についていえば、その多くが南は御座船入江川までしか描かれていないものが多く、南浜浦・北浜浦などの在方地域を含めた範囲で城下町を比較分析することが難しい。

そこで今回、「阿州御城下絵図」をベースとする GIS 徳島城下町図の作成にあたっては、「御山下絵図」も参考にしながら、南限・南東限については富田浦内の潮除堤までを対象範囲とし、田宮川以北の田宮村、矢三村についても対象から外すこととした。これらの地区については、姓名の記載がない屋敷地区画のみならず、寺社や下屋敷などについても分析対象から除外した。

この結果、「阿州御城下絵図」をベースとした GIS 徳島城下町図のポリゴン総数は 2,551 にのぼる(表 1)。内訳は、藩施設 65、重臣屋敷 40、侍(士族)屋敷 1,272、卒(無足)屋敷 94、足軽組屋敷 93、下屋敷 24、町屋 188、神社・祠 28、寺院・庵 72、百姓(庄屋) 3、未記入地 666、その他 4 である。このうち、未記入地 666 ポリゴンの多くは徳島城下周辺の年貢地に居住し、版籍奉還にともない平民籍となった旧侍の屋敷地とみられる。侍(武家)屋敷地は本来、藩主が家臣に対して下賜されるものであるが、諸藩においては近世後期〜幕末期には家臣が増加し、城下(山下)内に下賜すべき屋敷地が確保できず、御長屋や農民・町人屋敷に住む家臣も急増した。安政年間(1854~1860)の「屋敷拝領不仕諸士住所帳」によれば、徳島城下でも屋敷地を拝領・拝借していない者は 219 人を数えたという(根津 1994)。安政期の鳥取城下町でも、拝領屋敷地 986 筆に対して、在方の年貢地に屋敷を構えていた家臣屋敷は 407 筆、面積では拝領地の 114.9ha<sup>5)</sup>に対し、年

表1 明治初期の徳島城下町における土地利用

土地利用	ポリゴン数	比率	合計面積 m <sup>2</sup>	比率	平均面積 m <sup>2</sup>
藩施設	65	2.6%	530376.44	10.2%	8,160
重臣屋敷	40	1.6%	268,357	5.2%	6,709
侍屋敷	1,272	49.9%	1,967,744	37.9%	1,547
卒屋敷	94	3.7%	59,290	1.1%	631
旧足軽組屋敷	93	3.6%	312,510	6.0%	3,360
下屋敷・船置場	24	0.9%	168,608	3.3%	7,025
未記入地	666	26.1%	748,351	14.4%	1,124
町屋	188	7.4%	630,735	12.2%	3,355
神社・祠	28	1.1%	91,795	1.8%	3,278
寺院・庵	72	2.8%	400,178	7.7%	5,558
百姓	3	0.1%	7,072	0.1%	2,357
その他	4	0.2%	1,703	0.0%	426
合計	2,549	100.0%	5,186,719	100.0%	...

面積は、図1のGIS徳島城下町図のジオメトリ演算により算出。

貢地の屋敷地は22haを占めた。さらに、鳥取城下町では、拝領主と異なる居住者が占める割合は28.4%にも及び、「相対替え」が日常的に行われていた(平井2014b)。

そこで、未記入地666件を藩政期の侍屋敷とみなして用途別の面積を計算すると、全土地利用面積約525haのうち、藩施設・侍屋敷地・卒屋敷地・足軽組屋敷・下屋敷・未記入地の武家地合計は412.2haで全体の78.5%に及び、町屋地区が12.0%、寺社地が9.4%という結果となった。鳥取城下町の場合にも、在郷年貢地を含む城下における武家地は78.2%を占め、町屋地区は12.2%、寺社地は9.5%であった。矢守(1970、292-306頁)は、明治10年(1877)前後の調査にかかる「府県地租改正紀要」から旧城下町における侍屋敷：町屋地区の面積比を算出して、徳島城下町については78.3：21.7、鳥取城下町では65.5：34.5と推定している。これらの数値を単純に比較することはできないが、徳島城下町・鳥取城下町についていえば城下において武家地が占める割合が極めて高く、「侍屋敷の面積は、大藩ほど大」とする矢守の指摘に合致する結果となった。

## 6 徳島城下町の再編と拡大

既述のように、徳島城下町は天正13年(1585)の蜂須賀家政入部以降、平山城の城山を中心に城下町建設が進められた。

城下町建設当時の都市プランや実態については不明であるが、当初は城郭の置かれた徳島と寺島地区がその中核をなしたと考えられている。1)寺島地区について当初は「寺町」をなし、天正年間末の16世紀末頃までに現在の寺町に移転した、2)それに関わって城下

町の北に興源寺、東に蓮花寺・慈光寺、南に観音寺が重点的に配置された可能性などが指摘されている(「徳島城」編集委員会編1994)。

こうした初期の徳島城下町が大きく再編されるのは、寛永後期である。寛永16年(1639)頃に、現在の常三島地区(徳島大学工学部付近)にあった船置所が福島地先の安宅に移転し、在郷の佐古村や(東・西)富田浦の一部が新たに城下に組み入れられた。その様子を示した寛永16年(1639)以前作成とみられる「(忠英様御代)御山下画図」(国文学研究資料館蜂須賀家文書1227)は、おそらくは城下再編について幕府と打ち合わせるための伺い絵図の控図とみられる。この「(忠英

様御代)御山下画図」の佐古村には、「町屋ニ被成所、但絵図最前より御前ニ御座候」と書かれた懸紙が付されていて、その新城下の縄張りを示したものが、寛永18年の「佐古屋敷割之図」「西富田屋敷割之図」「富田屋敷割之図」(いずれも国文学研究資料館蜂須賀家文書1216)と推察される。既述のように、こうした城下町の再編は、寛永15年の阿波九城の廃止にともなう、家臣団の集住を受けてのものである。

新たに増設された佐古・西富田・東富田地区には、阿波五街道の一角をなす伊予街道・土佐街道が整備され、主には長方形街区からなる足軽組屋敷や町屋から構成された。徳島藩では、すでに寛永8(1631)～12年の「由良引け」時の洲本城下町建設にあたって、徳川期に特徴的なヨコ町型の城下町プランを受け入れており(平井2009)、これにより徳島城下町は名実ともに徳川政権下の城下町として発展していくことになる。

図2は、「阿州御城下絵図」をもとに作成した明治初期のGIS徳島城下町図に、「佐古屋敷割之図」「西富田屋敷割之図」「富田屋敷割之図」に示された新町割のおおよその範囲を示したものである。街区内部の町割・屋敷割は明治初年の「阿州御城下絵図」の区画がそのまま反映されており、寛永18年当時の町割・屋敷割とは異なることを断っておく。また、富田屋敷割(東富田)地区南縁部の屋敷割は明治初期にはかなり変化しており、その範囲の確定には、今後さらに検討を加える必要がある。

そうした前提条件付ではあるが、本図から改めて明らかになるのは、この寛永後期の城下町再編前に成立していた寺町および新町地区が、新城下地区が整備される以前には、徳島城下の西および南方面の防衛の役

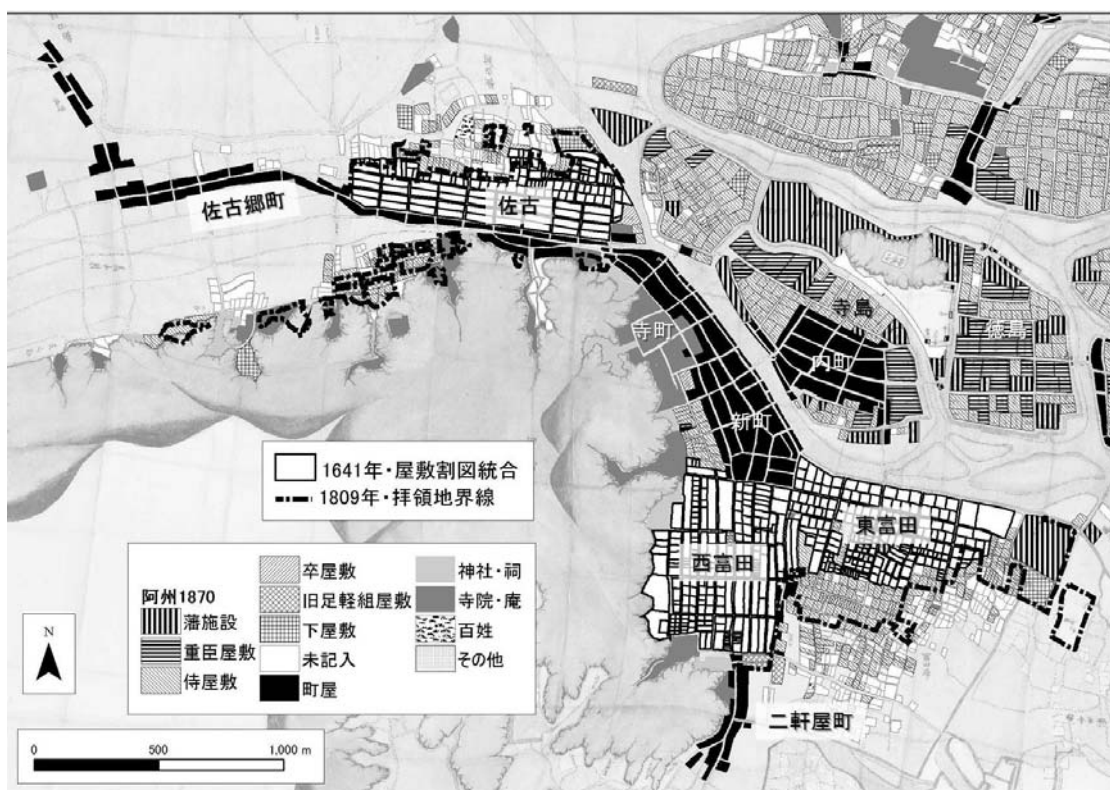


図2 佐古・西富田・東富田における寛永18年（1641）の町割とその後の侍屋敷・郷町の拡大  
下図は「阿州御城下絵図」（徳島県立博物館蔵）。

割を担っていたということである。仮に、天正年間末～慶長初期の1590年代に寺島に所在した寺院の寺町への移転が始まっていたのであれば、寺町の成立は豊臣期の都市プランの下に進められたことになる。その場合、新町川南岸の寺町・新町は、徳島・寺島地区防衛のための外町として位置づけられる。すなわち、新町川や助任川という「総構」によって圍繞された徳島・寺島地区は、城下町建設当時は侍屋敷や町屋・寺院などが混在し、徳島城下町は矢守（1970、248-259頁）が説くBタイプの「総郭」型プランを呈していたが、1590年代には寺町・新町の整備を図ることで、いわゆるCタイプの「内町・外町」型プランに移行した可能性が考えられる。

そして、それから40年余を経た寛永後期～正保期の1640年代になって、鷲の門を起点に阿波五街道を整備し、寺町・新町の両側に街道・足軽組屋敷・町屋などを配して新城下地区を拡張した。その後、城下町の発展に伴い、街道沿いに佐古郷町や二軒屋町が形成されることになる。

寛永18年の「佐古屋敷割之図」では、足軽組屋敷と町屋が佐古9丁目まで配置されており、図2にはその範囲を図示している。さらに図2には、ジオリファ

レンスした文化6年（1809）分間絵図「名東郡佐古村・蔵本村絵図」（徳島県立図書館蔵）中に示された「拝領地」の境界線を示している。これによれば、佐古地区では、寛永18年頃の拝領地（御山下）の範囲は約170年後の文化6年でも大きくは変わっていない。しかし、文化6年の分間絵図では、足軽組屋敷北側の佐古村地内の地目「畑」の中に多数の茅葺き家屋をみることができ、明治初期の「阿州御山下絵図」でも侍屋敷地が確認される。これらはいずれも、「屋敷拝領不仕諸士」の「年貢地建家」とみられる。

この佐古地区では、侍屋敷よりも郷町の発達が顕著である。元禄6年（1693）に町奉行支配となった佐古郷町は、佐古五丁目から鮎喰川土手までの4ヵ村にわたって伊予街道沿いに延びる町場で、同年に112軒を数えた家数は、寛政元年（1789）には583軒にまで増加している（根津1994）。なお、眉山（佐古山）北側に広がる拝領地は寺社地である。

他方、寛永18年頃に御山下に編入された富田地区についても、文化6年（1809）作成の「名東郡富田浦・東富田・西富田・新町分間絵図」（徳島県立図書館蔵）を用いて同様な分析が可能である。

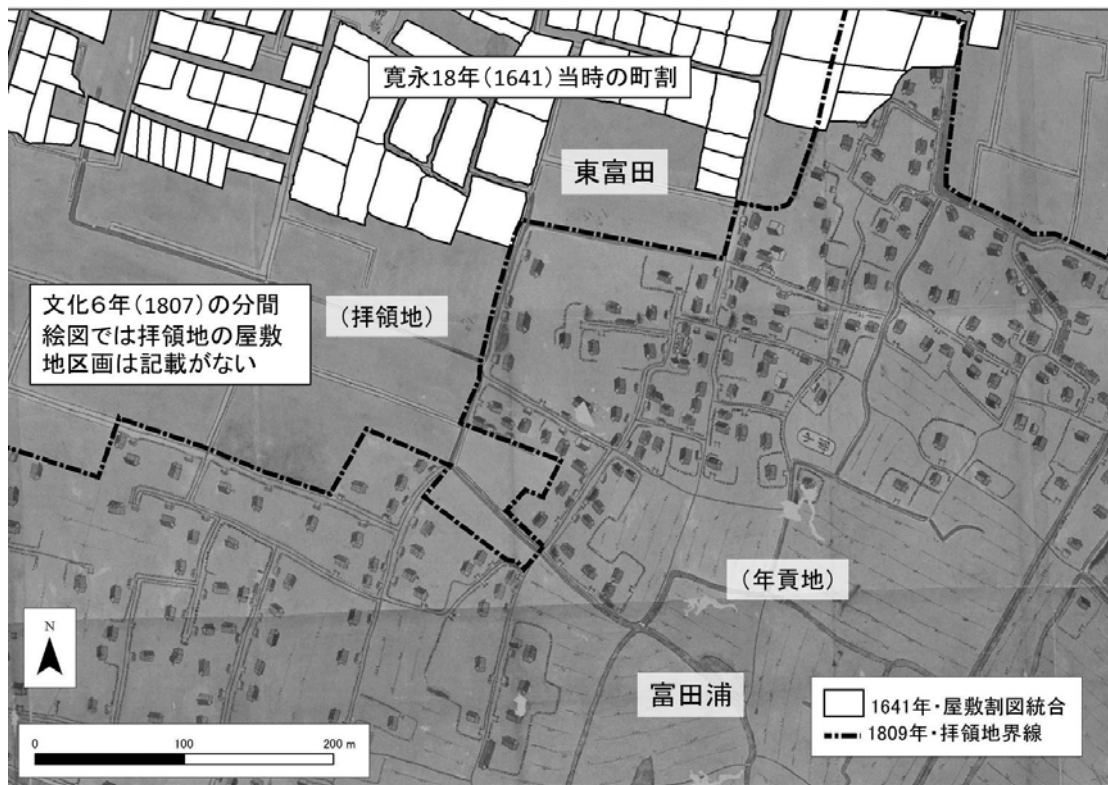


図3 東富田地区における「屋敷扨領不仕諸士」屋敷（年貢地建家）の広がり

下図は文化6年（1809）「名東郡富田浦・東富田・西富田・新町分間絵図」（徳島県立図書館蔵）。

主に足軽組屋敷が配置された西富田地区については、扨領地（御山下）の範囲は拡大していないものの、寛永18年の「西富田屋敷割之図」に示された眉山山麓西端の足軽組屋敷（御えさし）26軒は、承応年間（1652-58）以降に松岳寺、本源寺、松巖寺、光仙院といった寺社地にとって代わっている。佐古・西富田・東富田を描く寛永18年の「屋敷割之図」については一部に「明地」もみられ、足軽・卒を中心とした屋敷割が完了した状態ではないことが指摘されている（羽山2001）。それゆえ、これら「屋敷割之図」が幕府に伺いを立てる計画図であったとすれば、眉山山麓西端の足軽組屋敷（御えさし）26軒については、その後寺社地に計画変更された可能性もある。いずれにしても、1650年以降における松岳寺、本源寺、松巖寺、光仙院などの配置により、眉山山麓一円が寺社地で充填され、眉山への立ち入りが制限されたことになる。

他方、東富田地区では寛永18年以降も侍屋敷地は南方に拡大し、その一部は扨領地でもあった。また、新町川沿いの東側にも、のちに蜂須賀家の東御殿や家老稲田家・賀島家の下屋敷などが設けられ、その結果、東富田地区では御山下地区の実質的な拡大をみることになる。文化6年（1809）の「名東郡富田浦・東富田・西富田・新町分間絵図」では、「扨領地」の南側にも

瓦葺き・茅葺きの家屋が多数散在しており、これらの中には「屋敷扨領不仕諸士」の「年貢地建家」とみられる（図3）。さながら、畠地にスプロール状に広がる新興屋敷地の様相を呈している。

#### 付記

本報告は平成25～28年度基盤研究(A)「GISを用いた近世城下絵図の解析と時空間データベースの構築」(代表：平井松午、課題番号25244041)の成果の一部である。

#### 注

- 1) 個人蔵ではあるが、ともに安政期頃の徳島城下を示す精度の高い城下絵図として「御山下絵図」「御山下島分絵図」がある（徳島市立徳島城博物館編2000・2001）。
- 2) 寛政4年（1792）に阿波・淡路両国合わせて家臣数4,358人（服部1966）を抱えていた徳島藩は、版籍奉還によって士族・銃卒合わせて約1,580人規模（三好ほか1992、35頁）に減少している。このことから、「徳島藩御城下絵図」や「阿州御城下絵図」に侍名が記載されていない屋敷地の多

- くは平民籍に組み入れられたか、明け地（上知）となった旧侍屋敷地ではないかと推定される。
- 3) アフィン変換後の誤差値は絶対誤差値ではない（出田ほか1998、田中2014）。
  - 4) 1間を6尺もしくは6尺5寸とする場合がある。
  - 5) 面積はArcGISのジオメトリ演算で算出。以下同じ。

## 文献

- 出田和久・木村圭司・宮崎良美（1998）：近世絵図の地図性—歪みの計測による若干の検討—、出田和久編『平成10年度文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「人文科学とコンピュータ」公募班研究成果報告書 古地図に描かれた内容のデータベース化のためのシステム構築』、44-64頁。
- 「徳島城」編集委員会編（1994）：『徳島城』徳島市立図書館。
- 出田和久・南出眞助（2014）：佐賀城下町絵図の歪みと精度、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、239-256頁。
- 田中耕市（2014）：GISを援用した実測図の精度評価法についての一考察、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、273-282頁。
- 田中耕市・平井松午（2006）：GISを援用した近世村絵図解析法の検討、徳島地理学会論文集9、41-54頁。
- 塚本章宏（2012）：近世京都の刊行都市図に描かれた空間、HGIS研究協議会編『歴史GISの地平』勉誠出版、121-130頁。
- 塚本章裕（2014）：文化・文政期の鳥取藩における測量図の精度、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、131-143頁。
- 塚本章宏・磯田 弦（2007）：「寛永後万治前洛中絵図」の局所的歪みに関する考察、GIS—理論と応用15-2、111-121頁。
- 徳島市立徳島城博物館編（2000）：『徳島城下絵図図録』同館。
- 「徳島城」編集委員会編（1994）：『徳島城』（徳島市民双書28）徳島市立図書館。
- 徳島市立徳島城博物館編（2001）：『絵図図録第二集 徳島城下とその周辺』同館。
- 根津寿夫（1994）：城下町、「徳島城」編集委員会編『徳島城』（徳島市民双書28）徳島市立図書館、75-91頁。
- 服部昌之（1966）：城下町徳島における都市構造の変容過程、地理科学5、23-36頁。
- 羽山久男（2001）：西富田屋敷割之絵図、徳島市立徳島城博物館編『徳島城下とその周辺』徳島市立徳島城博物館、41-42頁。
- 平井松午（2001）：徳島城下の土地利用、徳島城博物館編『徳島城下とその周辺』（図録）徳島城博物館、52-55頁。
- 平井松午（2009）：近世初期城下町の成立過程と町割計画図の意義、徳島藩洲本城下町の場合、歴史地理学51-1、1-20頁。
- 平井松午（2012）：洲本城下絵図のGIS分析、HGIS研究協議会編『歴史GISの地平』勉誠出版、109-120頁。
- 平井松午（2014a）：近世城下絵図の分析と課題—歴史GISからのアプローチ—、史潮76、22-35頁。
- 平井松午（2014b）：安政期の鳥取城下絵図にみる侍屋敷地の実像—GIS城下図の比較分析—、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、175-197頁。
- 平井松午（2014c）：幕末箱館における五稜郭および元陣屋の景観復原、地理学論集89-1、26-37頁。
- 平井松午（2014d）：徳島藩の測量事業と実測分間絵図、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、77-98頁。
- 宮本武史編（1972・73）：『徳島藩士譜 上・中・下巻』徳島藩士譜刊行会。
- 三好昭一郎・松本 博・佐藤正志（1992）：『徳島県の百年 県民百年史36』山川出版社。
- 矢守一彦（1970）：『都市プランの研究』大明堂。
- 渡辺 誠・野積正吉・平井松午（2014）：「金沢町往還筋分間絵図」と「金澤十九枚御絵図」の精度、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、167-174頁。
- 渡辺理絵・小野寺淳（2014）：鶴岡城下絵図の精度に関するGIS分析、平井松午ほか編『近世測量絵図のGIS分析』古今書院、225-238頁。